

# History



第54回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門公式出品作品

諏訪敦彦監督作品

## History

ベアトリス・ダル

町田康

馬野裕朗

H I R O S H I M A

そこはいつしか

新たな愛のうまれた場所になった。

誰も気づかないうちに…。

ベアトリス、彼女さえ…。

撮影監督  
キヤロリーヌ・シャンブリエ

プロデューサー

仙頭武則

監修

和田雄一

脚本

菊池信之

音楽

林千栄

音楽

鈴木治行

編集

諏訪敦彦

大重裕一

制作

サンエントマーズ・ワークス

電話

T-MAGLIA

WOWW+東京

アートル

配給

東京テアトル

監製

フランス大使館文化部

2001年

日本映画

35mm

カラー

三分

© WORKS

# History



諏訪敦彦監督作品

撮影監督—キャロリーヌ・シャンプブチエ

ベアトリス・ダル

町田康

馬野裕朗

プロデューサー—仙頭武則

照明—和田雄二

録音—菊池信之

美術—林千奈

音楽—鈴木治行

編集—諏訪敦彦 大重裕二

制作—サンセントシネマワークス

製作—エレクトロニクス

WOWOW+東京テアトル

配給—東京テアトル

2001年/日本映画/35mm/カラー/111分

WORKS

もう消せないのだ。出会ってしまったから。できるのはただ見つめること。

1959年、本国フランスで、そして日本で話題を呼んだ『二十四時間の情事』。名のないフランスの女と日本の男。彼らは広島で出会った。

「私はヒロシマですべてを見たわ」「いや、君は見えていないよ」被爆地であるヒロシマへ、そして出会いの地(広島)で2人は愛しあった。そして男はただ、女を見つめた。40年後のあの時とおなじその場所、またそのような男女がうまれる。

ひとりの監督が自身の故郷広島で、『二十四時間の情事』のリメイクを撮影している。その横には台本を手にした女優、ベアトリス・ダルがいた。

撮影は順調にスタートしたかのように見えた。40年前にマルグリット・デュラスが書いた「ヒロシマモナムール」。しかし、この台本通り演技しなければならぬことに、ベアトリスは次第に違和感を覚えはじめる。超えることのできない「時間」という大きな壁に、苦しみ苛立つベアトリス。そして彼女はついに演じることができなくなる。

相手役の男は何も言わず、ただ女を見つめた。そして迎える撮影の中断。不穏な空気が流れる撮影現場にあるひとりの真白なキャンバスに5つの筆で絵を描いていくような

「これほどまでに真実の私を撮った映画があったらどうか」。ベアトリスは呟き、ただ泣いた。

女優としてひとりの女として、悩み、微笑む彼女は美しかった。ふれられるほどに近くにいながらも、遠くから、ただ見つめられる彼女はいつでも美しくかった。これはフィクションなのか、ドキュメンタリーなのか。それはすべてを掬い取るその視線の中に取められていく…。

影と光に包まれた女を美しくもはかなく見つめつつける監督に、『2/DUO』と前作『M/OTHER』で脚本なしの即興演技での創作という、新しい形としての映画を浸透させ話題を呼んだ諏訪敦彦、名画のような美しい映像の中に女を焼きつける撮影には「ゴダールの決別」のキャロリーヌ・

シャンプブチエ、『二十四時間の情事』でエマニュエル・リヴァ

演じたヒロイン「女」に「ベティ・ブルー 愛と激情の日々」

訪問者が現れた。フランスの女と日本の男。何もいわず、何もきかない。言葉の通じない二人。

だから男はただ、女を見つめた。

瞬きをする間にきくと彼女は消えてしまうだろう。しかし、彼女を見つめつつけるもうひとつの視線が、いつでもそこにはあった。まるで遠くから愛撫でもするかのように。そう出会ったその瞬間からずっと。

HIROSHIMA——そこはいつしか新たな愛の生まれた場所になった。

誰も気付かないうちに…。ベアトリス、彼女ささえ。



11月レイトショー! すべては HIROSHIMA から始まった…。

特別前売ご鑑賞券¥1500 絶賛発売中!!

テアトル梅田のサービスデー

火曜日: 男性の方 ¥1000 / 水曜日: 女性の方 ¥1000 / 12月を除く第1水曜日 ¥1000均一 (12月は1日)

梅田ロフトB1 06(6359)1080

テアトル梅田

http://www.cinemabox.com/